

立春の候 宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部会員の皆様には、恙なくお過ごしのことと拝察する次第です。また皆様には日頃より当支部運営に際し格段のご高配を賜り、この場をお借りして深甚なる敬意と感謝を申し上げねばなりません。

1月の自衛隊関連行事は12日に恒例となりました「宮崎地方連絡本部創立64周年記念式典」及び「新年賀詞交換会」がMRTmiccで盛大に開催され、参加をしてきました。

冒頭主催者代表挨拶で大岐OB会長が「現職自衛官は云いにくいでしょうから私が代わって言いますが、自衛隊明記の憲法改正には反対です」と発言され、会場は凍り付いた次第です。

その趣旨は、「中途半端な憲法改正はするべきではなく、もっと国民全体を巻き込んだ議論を行い、かつ合意形成を図らねばならない」とのようになら私には聞き取れませんでした。

比較的前列にいた私の無然たる表情が見えたのか、乾杯が終わるとすぐに大岐OB会長が私のテーブルに来られ、「先ほどの挨拶で一番怒っているのは小倉さんだと思いビールを注ぎに来ました」と柔やかな大先輩からのお酌を受け乍ら、未熟な自分を大いに反省したところです。(笑)

また同日、これまた恒例の「えびの駐屯地新年賀詞交換会」も開催され、身体が一つしか無い儚さ故こちらは欠席でしたが、近隣部隊行事等はなるべくブッキングせぬようスケジュール調整をして頂ければ、我々協力団体もどちらにも不義理をせずに、誠に有り難いと考えました。

さて年始早々韓国との様々なトラブルが表面化していますが、我々の関心事である下記事件のメルマガが登録されましたので、小川先生のお許しを得て以下に転載致します。

◇◆韓国海軍によるレーダー照射事件◇◆

国際変動研究所理事長 軍事アナリスト 小川和久

Q: 韓国海軍の駆逐艦『広開土大王(クァンゲト・デワン)』が海上自衛隊のP-1哨戒機に対して火器管制レーダーを照射した事件で2019年1月14日、日韓双方の防衛当局による直接協議がおこなわれましたが、相変わらず平行線に終わったと報じられています。そもそも私たちは、軍艦がどんなレーダーを搭載しているのか、よく知りません。解説をお願いします。

小川:「双方の協議は、一方が他方を呼びつける形にならないように、第三国シンガポールで開かれました。毎日新聞が引用した聯合ニュースによると、午前は韓国大使館、午後は日本大使館で協議がおこなわれました。韓国国防省によると出席者は、日本側が防衛省統合幕僚監部の引田淳・運用部長、同省の石川武・防衛政策局次長、韓国側が軍合同参謀本部の夫石鍾(プ・

ソクジョン) 軍事支援本部長、国防省の李元翼(イ・ウォンイク) 国際政策官でした」

「NHKは、15日の定例記者会見における韓国国防省の崔賢洙(チェ・ヒョンス) 報道官の発言を報じています。それによると同報道官は、日本側から互いに電波記録を示すよう打診があったとしたうえで、『日本側の要求は「一部の電波記録を公開するので、韓国側はすべてを公開してほしい」という要求で、受け入れられなかった』、『非常に無礼な要求で、問題を解決する意思がない主張だ。日本がこのような紳士的ではない行動を続けることに遺憾の意を表明する』などと述べました」

「日本側は、15日午後の記者会見で菅義偉官房長官が、韓国の報道官についていちいちコメントしないとしたり、『客観的、中立的な事実確認を進めていくうえでは、相互主義の観点から双方が必要なデータを示すのが不可欠。日本側からそのような提案をしたが同意は得られなかった』と、淡々と述べるに止めています」

「それでも韓国側が不誠実な態度を続けることに、温厚なことで知られる河野克俊統合幕僚長(海将)は『(レーダー情報の相互開示を求めた日本を「無礼」としたことについて)「極めて不適切で遺憾だ」「われわれは(レーダー照射の)確固たる証拠を持っている。韓国側は真摯(しんし)に受け止め、事実を認めて再発防止に努めてほしい』と異例のコメントを発しました」

「しかし、2019年1月10日号の編集後記で私が申しあげたとおり、韓国側の強気の姿勢はあくまで“表面的”なもので、“韓国側の焦り”が感じられます。日本側から大騒ぎする必要はまったくなく、厳しい姿勢を表明しつつも、淡々と沈静化を図ればよいのです。今回、私もいろいろと調べて、メディアで報道されていない発見がありましたので、以下に軍艦が搭載するレーダーについてお話ししましょう」

◆韓国政府高官との立ち話

Q: 報道されていない「発見」とは？

小川: 「韓国海軍の駆逐艦が、火器管制レーダーと同じ電波を出す別のレーダーを使っていた可能性が出てきたのです。これは、韓国駆逐艦が使っているレーダーについて勉強しておかなければわからない。その話をしましょう」

「1月10日号の編集後記にも書きましたが、1月7日の新年互礼会の会場で、私は韓国政府の高官から声をかけられました。自分たちの言い分も聞いてくれというのです。この問題について私が発信した(このメルマガのほか、年末のJBpressへの寄稿はページビューがすぐ60万以上になっていました)ものを読んで、小川にも話しておこうと思ったのでしょう」

「高官がまずいっていたのは、事後の動きについて『(韓国側は)バカなことをやった』ということで

した。しかし、『これだけは伝えておきたい。**火器管制レーダーは照射していない**。これは海軍参謀本部の高いレベルに直接確認したことだから信じてほしい。海上自衛隊の哨戒機がとらえたのは、火器管制レーダーではなく、別のレーダーから出た同じような電波だった』というのです」

「そこで私は、『その話は、にわかには信じがたい。これからこちらでも調べ、きちんと結論づけなければならない話だ』と応じました。同時に、『友好国の飛行機に対しては、なぜ自分たちの周囲を飛んでいるのかと聞くべきだし、高度が低すぎると思えばそう伝えるべきだ。レーダー照射を検知したあと、海上自衛隊が三つの周波数で問い合わせたのに一切答えないという態度は、決してやってはいけないことだ』ともいいました。これに反論はありませんでした」

「高官がいていたことはもう一つ、『なぜ韓国海軍の駆逐艦があそこにいたかは、自分たちもわからない。いずれ韓国国内でわかると思うが』ということでした。というのは、北朝鮮漁船の救助を名目にしていましたが、その漁船の近くには海洋警察のいちばん新しい巡視船（警備救難艦）が出動しており、海自哨戒機の撮影した映像にも映っているからです」

Q: 海自の哨戒機が「ふつうは火器管制レーダーから出る電波」をとらえたことは、たしかな話でしょう。哨戒機が「火器管制レーダーから電波を照射された」と認定した根拠は、電波の種類「だけ」だったのですか？

小川: 「いや、違います。海上自衛隊は韓国駆逐艦『広開土大王』のレーダー電波の特性を全てデータベース化しており、それぞれが指紋や音紋のように固有の特性を持っていることから、照合すればどの船のどういう種類のレーダーかということがわかるのです」

「その電波の特性は公表できるものではありませんが、それだけでなく、自衛隊の哨戒機は、火器管制レーダーのアンテナがこちらの方にむけられたことを確認しています。これは哨戒機が撮影した写真にもとらえられ、公表されました。ふつうは、火器管制レーダーのアンテナを向けること自体が敵対行為なのです。しかも、電波の種類も火器管制レーダーが使うXバンドだった。だから、火器管制レーダーから電波を照射されたと受け止めるのは、当たり前の話です」

「以上のことは、韓国の政府高官にも話しました。すると『そうなんだが、照射はしていない』という。『では、なぜレーダーを向けたの？』と問いただしたら、『光学装置（望遠鏡）で確認するためだった』という説明でした。火器管制レーダーに同軸で光学装置が付いており、レーダーを使うつもりがなくても、望遠鏡を使おうとしたためにアンテナが動いた、という。『その望遠鏡の画像はあるのか？』と聞いたら『ない』との回答でした。なにしろ新年会の立ち話ですから、これ以上の話はしていません」

「これについては、『韓国国防部の関係者』を情報源として、『近くにいた海洋警察の警備救難艦の対水上レーダーの電波があたった』という情報も流れましたが、私と話した韓国政府高官は駆

逐艦が搭載している『別のレーダー』の電波だという文脈で話をしていました。警備救難艦の対水上レーダーはXバンドではありませんので、そちらの話は成り立ちにくいですね」

◆駆逐艦が出したもうひとつのXバンド

Q: 今回問題となった韓国駆逐艦『広開土大王』の火器管制レーダーはSTIR-180ですね。つまり、海自の哨戒機から撮影した写真でアンテナが真円に写っていれば、こちらを向いている、と。

小川:「そうです。前後に二つ搭載されているうち、後部の1基のアンテナが哨戒機に向けられました。軍用機は電子戦支援(ES=Electronic warfare Support)の機能を持っています。電波誘導型のミサイルや火器管制レーダーで追尾されたら、ただちに危機を回避しなければなりませんから、どんな電波が当てられているかわかる電波探知装置を搭載しているのです。それで、何ヘルツのXバンドの電波が来ているとわかりました。目視でも火器管制レーダーのアンテナがこちらを向いている。だから、火器管制レーダーが照射されたものとして海自の哨戒機はただちに現場を離れたわけです」

「ところで、『広開土大王』級駆逐艦の諸元を見ると、早期警戒レーダーとしてAN/SPS-49、目標捕捉レーダーとしてMW-08、対水上搜索レーダーとしてSPS-95K、火器管制レーダーとしてSTIR-180(2基、これ以外は各1基)を搭載しています。SPS-95K以外は、すでに写真付きで紹介しました」

「そこでSPS-95Kという対水上搜索レーダーについて調べると、これはジェーン海軍年鑑や米海軍協会の資料ではAN/SPS-55Mとされる対水上搜索レーダーとわかります。SPS-95Kの周波数はCバンド(『5.45～5.825 GHzの Gバンド』とする資料もあり)とされていますが、AN/SPS-55MのほうはXバンド(9.05～10GHz)の周波数を使うのです。ですから、海上自衛隊の哨戒機は、この電波をとらえていた可能性があります」

「火器管制レーダーが照射されたのか、それとも対水上搜索レーダーの電波があたっただけなのか、その違いは照射時間を見ればわかります。対水上搜索レーダーだと、回転しているアンテナからの電波があたるわけですから、間欠泉のように一定の間隔で検知されます。しかし、火器管制レーダーのほう狙いを付けて照射するわけで、一定時間にわたって強い電波が検知されるのです。今後の実務者協議では、この点が重要なテーマになるでしょう」

「このことは、まだマスメディアは知る由もなく、報じていませんが、海上自衛隊のなかでは、特に海幕防衛部のほか日韓協議の担当者は、わかっているでしょう。いずれにせよ、編集後記で書いたように、2019年1月7日に沈勝燮(シム・スンソプ)韓国海軍参謀総長が、駆逐艦『広開土大

王』の所属する海軍第1艦隊司令部を“激励”に訪れ、『外国の航空機との遭遇などの偶発的状況にも国際法にのっとって対応しなければならない』と“叱責”したことで、韓国は謝罪こそしなかったものの、非を認めたことになります」

「ようするに今回の事件は、韓国駆逐艦の乗員が反日姿勢から、日本の哨戒機を脅かしてやろうと思って火器管制レーダーを照射した話ではなく、火器管制レーダーが動くということを忘れたか、軽視したかで光学装置（望遠鏡）で見ようとした“初歩的なミス”が、間違いの始まりだったことにしたいようです。もちろん、艦長が承認、あるいは指示しなければならない動作ですから、艦長の処分は織り込み済みと思われます」

「その後も、なぜ自艦の周囲を飛んでいるのか訊ねようとせず、日本側の問い合わせにも答えないというミスを犯したうえ、事後に『日本機が低空飛行をして騒音がひどかった』と、すぐわかる嘘（P-1はP-3に比べても静粛性がきわめて高い）をつき、音楽をつけたビデオ（大半は日本側の撮影映像）を公開してしまうなど、韓国側の対応は、子どもじみているというか、なんとも格好悪いものでした」

「しかし、なぜあの海域に『広開土大王』がいたのかについては、北朝鮮漁船への瀬取りや密輸の現場を見られなくなかったため、艦長の指示で火器管制レーダーが照射された疑いも浮上してきて、しばらくは謎が謎を呼ぶ状況が続くでしょう」

「ともかく、韓国にも面子がありますから、日本側は大人の対応をすることが大事ですね。大騒ぎせず、韓国国内の文在寅政権への批判の高まりと歩調を合わせる形で、事態を沈静化させればよいと思います。厄介な隣人との付き合いには、辛抱しかないのです」 以上。

小川先生の分析は韓国軍の要人から直接伺った話として大変臨場感と説得力がありますが、他の新聞や週刊誌の記事は、ニュースソース等の信憑性が疑われるものもあるようです。

支部会員の皆様も自らの耳目を働かせて、何が真実かをしっかり見極めて欲しいと考えます。

さて今月は8日に「第16回宮崎県防衛協会青年部会宮崎支部総会」を18時より、ホテルスカイタワーにて開催します。福田5空団司令を始め中川24連隊長、廣田43連隊長、中嶋高畑山分屯基地司令などの各部隊長がお見えになりますので、支部会員の皆様も挙ってご参加下さい。

それでは来る2月8日、17時半よりホテルスカイタワーで鶴首してお待ち申し上げます。

平成31年2月1日

宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部長 小 倉 和 彦